

# 名探偵と蕎麦

～ 探偵小説にみる 東京蕎麦屋小史 ～

江戸ソバリ認定委員長 ほしひかる

## ◎はじめに・・・「蕎麦はなぜ昔に還らぬか」

大正から昭和の初めごろに「名人」といわれた村瀬忠太郎(「やぶ忠」「藪忠」創業者)は、最近の蕎麦には品位がなくなると嘆いて『蕎麦通』の本を出版した。それを私は、「蕎麦界の『歎異抄』」だと拙著『新・みんなの蕎麦文化入門』のなかで申上げた。

指摘されれば確かに、江戸中期に上梓された日新舎友蕎子の『蕎麦全書』などには、江戸蕎麦の品位がうかがえる。

なら、村瀬忠太郎が生きた明治・大正・昭和前期の蕎麦屋はどうだったのだろうか？

それを調べようと思ったが、近代の蕎麦屋を一望できるような資料は見当たらない。

そこで、敢えて物語の本筋とは関係のない探偵小説に、背景として描かれている各時代の蕎麦屋を見てみた。まずはそれをご覧いただきたい。

## 1. 村上元三の加田三七捕物控

話は明治から始まる。

廃藩置県が行われた明治4年、元八丁堀同心の加田三七は、湯島天神下に「生蕎麦 翁庵」を開いた。釜場の幸助は三七と組んでいた岡ッ引きだったが、元はといえば幸助の本職は本所の蕎麦屋。当然「翁庵は旨い蕎麦切だ」と評判だった。しかしそんな素性の二人だから探偵が道楽。事件が起きると商売をほったらかしてしまいがちだから、近所では「同心蕎麦屋」と呼ばれていた。

三七は、夫婦仲も親子関係もうまくいっていた。そのうえお人好しの世話好きで、ときには江戸っ子らしく粋な計らいもやってのける。

それが見事に出ているのが、『捕物そば屋の巻』のうちの「むかしの夢」の章である。

ある日のこと、「翁庵」へ文金高島田に帯を矢の字に結んだ美しい娘が蕎麦切を買いにやって来た。娘は、袱紗をかけた伊万里焼の見事な皿と蓋付の可愛らしい小鉢に蕎麦切を一人前入れてほしいと言う。見ていた三七の息子もその娘に一目惚れしたらしいが、それは暫らくおくとして、持ち前の元同心の好奇心から、「何者だ？」と調べてみると、近ごろ近所に引越して来た女主人とその女中らしい。しかしその女主人は「茶道・書道・生花 御指南所」の看板を掲げてはいるものの弟子の一人もいそうにない。そのため質屋通いの貧乏暮らし、おそらく一つの蕎麦切を二人で分け合っているのだろう。と持ち前の人の好きから影ながら、知り合いを捕まえては「茶道・書道・生花を習いに行け」と勧める。そのお蔭か多少弟子が増えるようになったら、その娘は蕎麦切を買いに来なくなった。そこで「どうしたわけだ」と訪ねてみると、会ってびっくり、その女主人は三七とは幼馴染みだった。名はお游、30年前に田安家の御家人と夫婦になって、息子も一人できた。しかしながら暫くして夫と死別、そのため、お游は田安家の奥方に奉公に上がった。ところが廃藩置県後にお暇が下り、今は自分についていた召使と二人で貧乏暮らし、息子の方は静岡で勉強中とのこと。

しかし話はこれからだ。ある日のこと、殺人犯の写真が偶然三七の所に回ってきた。三七はそれを見て青くなった。お游さんにそっくりだった。会ったことはないが、きっと息子だ

ろう。そこで母親に確認してみると、息子は時勢を論じている間に口論となった相手の士族を斬って、殺人犯として追われているという。お游は、息子に生恥さらさないよう腹を切らせたいと泣く。

そこで三七は元同心でありながら、警官の捕物を混乱させ、お游さんの息子を逃がしてやる。息子は甲府へ落ち、そこで見事に腹を切った。

母親は残りの人生を息子の墓守をするために甲府へ旅立つが、その前に三七は別れの《卵切り》を食べさせる。そして三七の息子もお游さんの女中を嫁に迎えることができた。そういえば、森鷗外の『護持院原の敵打』にも《卵切り》が出てくる。

父を殺された息子や助太刀の叔父らが、敵打に出発する前に、菩提寺で墓参をして、残る家族との離別の盃を酌み交わしたとき、住職が「手打(手討)の《卵切り》です」と蕎麦を出してくれる。

似たような情景だ。江戸時代の別れには《卵切り》を食するようなことがあったのだろうか。

そんなだから、三七が活躍する明治初期にはまだ江戸の香りが残っていた。もちろん蕎麦切もこのころまでは手打ちでなければ蕎麦切ではないと思われていたから、三七の「翁庵」の蕎麦切も想像できるというものだろう。

ところで、明治43年生まれの上村元三は大正・昭和の人だからか、小説の中では「蕎麦」としている。しかし江戸時代は蕎麦麺のことを「蕎麦」とも、切って麺にするところから「蕎麦切」とも言っていた。そこで「手打ちでなければ蕎麦でない」という雰囲気のある明治には、「蕎麦切」の方が合っているはずと思い、筆者の上の文は「蕎麦切」としてみた。

## 2.江戸川乱歩の探偵明智小五郎

時代は移って大正になる。

名探偵明智小五郎、初登場の作品として知られる『D坂の殺人事件』。

話は大正10年ごろだ。「D坂」とはしゃれた名にしたものだが、本郷駒込林町の「団子坂」を指す。そういえば駒込林町42番地(現:千駄木3-2-7辺り)には有名な「団子坂藪蕎麦」があったが、大正期にはもうない。そのD坂(団子坂)にある古本屋の、近所でも官能的な美人として知られる細君が、隣のソバ屋の店主に殺害された。この「官能的」という言葉が事件の鍵、それを意識して読んでいけば鍵は開くはずだ。

ただ「ソバ屋」とは蕎麦屋なのか、中華ソバ屋なのか、小説のなかで麺のことは具体的に描写していないから分からない。「ラーメン屋と蕎麦屋は違うだろう！」と思われるかもしれないが、明治末から昭和の戦後までは中華麺(ラーメン)のことを「支那ソバ」とか、単に「そば」とか言っていた。また大正5年から昭和初期ごろの蕎麦屋は「蕎麦」も「支那そば」も供していたから、ややこしい。それに乱歩は作家になるまでの大正5



【D坂にある珈琲「乱歩」】



【旧江戸川乱歩邸(立教大学)】

年から13年まで多くの職に就いていて団子坂で古本屋や支那ソバ屋を商っていた、と『探偵小説四十年』で自ら述べているから支那ソバ屋の可能性もゼロではない。と、乱歩先生の【下書き原稿】を調べてみると、案の定だった。完成原稿にはないけれど下書きには「支那そばや」とか、「ワントンを食っていた」という文字がある。

やはりそうかというわけであるが、とにかくこの時代は「蕎麦」も「支那そば」も混乱同類のころなのである。今でも蕎麦ではないのに「焼きそば」と言ったりしているのは昔のその名残だろう。

話は少し変わるが、関東大震災(大正12年)後から蕎麦屋は製麺機で蕎麦を作るようになった。頑固な職人がいなくても蕎麦屋を商うことができるようになったのである。だからなのか蕎麦屋は井物(親子井、天井、かつ井)やカレーライスからアイスクリームまで扱ったりして、大衆化していった。というのが、この時代の特徴である。



【製麺機の発明者：  
真崎照郷記念碑  
(佐賀市巨勢町)】

### 3.横溝正史の探偵金田一耕助

さらに時代は移って昭和になる。

名探偵金田一耕助の初登場は昭和21年の『本陣殺人事件』からだ、今回とり上げる『壺中美人』はその少し後の昭和29年ごろの事件。

成城町に住む陶器蒐集が趣味の画家が殺された。たまたま鍵穴から覗いていた老婆の話によると、不思議なことにチャイナドレスの女がくねくねと身体をくねらせながら壺の中に入っていったという。その怪しいチャイナ服の人物(男?女?)が事件の鍵となる。

蕎麦の場面は、駅前蕎麦屋で金田一耕助が《ざる蕎麦》を半分、等々力警部は《ざる蕎麦》と《天井》を平らげ、お互いの小食と大食ぶりをからかいあっている。

先に述べた製麺機の発明は明治の真崎照郷だったが、昭和になると電動モーターで動くようになって全国的に普及していった。蕎麦屋はさらに大衆化していったのである。

次に紹介する『白と黒』は昭和35年ごろの事件。

金田一耕助は、古い馴染みの元ホステスのある依頼で東京郊外の団地を訪れる。そんなとき、団地内のダストシュートで女の変死体が発見されるが、塗装用タールの下敷きとなっていたためにその容貌がわからない……。

もう少し話を続けたいが、探偵物の小説はどこまで紹介したら(バラしたら)いいかわからないところがある。そんなわけだから、今回は事件の詳細は控えたいと思う。

かといって、蕎麦の話だけは欠かせない。

というわけで、蕎麦の場面はというと……、金田一の古い馴染みはよく気が利く。刑事たちのために蕎麦の出前を頼んでくれる。すぐ、出前持ちが山のように《ざる蕎麦》を担ぎこんできた。さっそく金田一や等々力警部や大勢の刑事たちがご馳走になる。その様子は「ひとしきり蕎麦を手繰る音がかまびすしかった」と書いてあるから、さぞかし大人数が一斉にズズズーと蕎麦を吸る音は凄かったのだろう。また相当の数の出前だから自転車で運んだにちがいない。これまでの出前は足だったが、大正になってから自転車出前になった。なかには《もり》220枚を一度で出前したなんていう記録も残っているらしく、昭和30年代までは蕎麦屋の出前は東京の街の風物詩だった。その後、朝日屋の当麻庄司氏の出前機の発明によって原付自転車とかスクーター出前になった。

横溝正史が描いているこの駅前蕎麦屋と出前は昭和の大衆蕎麦屋の象徴だろう。そしてそれを支

えていたのが製麺機だった。

作品は変わるが、平岩弓枝の『肝っ玉かあさん』は典型的な大衆化時代の蕎麦屋の姿である。女将さんは昭和 11 年に 18 才で結婚し、「蕎麦屋でもやるか」と、「大正庵」を開業。21 才で長男を出産したものの 33 才で未亡人となる。しかしがんばって昭和 46 年には 35 周年を迎え、息子も跡を継いでくれるという大衆蕎麦屋一代記である。

ある蕎麦屋さんの長老は「あのころの蕎麦屋は儲かった。皆、小さいながらもビルを建てた」と懐かしんでいた。

一方では、江戸時代から続く老舗蕎麦店が情報交換会や勉強会を立ち上げた。それが老舗の会の「銅子会」(昭和 27 年)、老舗蕎麦店の勉強会「蕎話会」(昭和 28 年)、老舗蕎麦店の子弟たちの技術交流会「木鉢会」(昭和 33 年)である。こうした蕎麦界の大黒柱である老舗蕎麦店(更科・砂場・藪・尾張屋・神田まつやなど)が勉強会を開始したことが礎となって、蕎麦界は新転回へのきっかけをつかんでいた。

#### 4. 宮部みゆきの探偵杉村三郎

さらに時代は移って平成になる。

杉村三郎シリーズの『砂男』は、事件解決後に「探偵事務所」を立ち上げるから探偵杉村三郎にとっても重要な作品だ。

話は平成 23 年ごろ。主人公の杉村三郎は 30 代で離婚、妻の父の会社に勤めていたため失職し、故郷の山梨に帰って産直会社やフリー・ペーパーの記者などを始めた。そんなとき、配達先の、「手打ち蕎麦とほうとうの店」の店主の失踪事件に出会う。杉村三郎は蛸殻オフィスという調査会社からも事件解決を手伝ってほしいと頼まれ、引き受ける。とはいっても、事件はほぼ蛸殻オフィスが解決していき、三郎はシャーロック・ホームズの相棒ワトソンのように観察・記録者の立場にあるところが特色だ。

これは宮部ミステリーの性格によるのかもしれない。

今回の事件は…、蕎麦屋の店主が金が欲しい時に、ある謎の男と戸籍を交換した。ところが、謎の男というのは実は少年時代から異常性格で妹への暴行を続け、拳銃の果てに放火して母親と妹を殺していたことが段々分かってきた。

そこへ店主は、妻が妊娠したことを知らされる。「戸籍を買った俺は殺人者。当然生まれてくる児の父は殺人犯…」。店主の心は闇の世界に引きずり込まれていく。

題名の「砂男＝サンドマン」とはヨーロッパのおとぎ話～サンドマンは子供の目に魔法の砂をふりかけて眠らせ、きれいな夢を見せてくれるともいうが、子供を闇の世界へ連れ去る鬼だともいう～からとったもの。宮部みゆきは、謎の男を砂のようにつかみどころのない、怖い魔物(サンドマン)として描いたが、その闇の心理描写の説明役とし杉村三郎を選んだのだろう。

ともあれ、この事件を機に杉村三郎は蛸殻オフィスの支援のもとに探偵事務所を北区に立ち上げた。

ここに出てくる手打ち蕎麦は、事件とは直接関係はない。せいぜい山梨という土地柄(山梨は「蕎麦切発祥の地」説の一つ、そして「ほうとう」が名物)から「手打ち蕎麦とほうとうの店」が設定されたと思われる。

ただ言えることは、昭和 46,47 年ごろから、蕎麦界は手打ち蕎麦ブームという新しい段階に入り、昨今は「蕎麦は手打ちが美味しい」という風潮になったことだけは事実である。

## ◎探偵小説と蕎麦

蕎麦屋の加田三七の活躍は読んで気持ちのいい小説だった。

しかし、明智小五郎、金田一耕助、杉村三郎が手掛けた事件では、蕎麦屋は一背景にしすぎない。言葉をかえれば、犯人がソバ屋でなくてもいい。昼食が蕎麦でなくてもいい、失踪者が蕎麦屋である理由もない。しかしそれだけに、当時のソバ屋、蕎麦、手打ち蕎麦がそのまま書かれているから、「東京蕎麦屋小史」として大いに参考になると考える。

## ◎おわりに…もっと蕎麦屋へ行こう

このように大正・昭和前期あたりの光景は大衆蕎麦屋の時代だったと見ていいだろう。たまに言われる「蕎麦は庶民のもの」という見方もこの時代のものだと思う。

ただ、こうした大衆蕎麦屋から、定番の《蕎麦屋の天婦羅》や、独特の《蕎麦屋のカレー》や《蕎麦屋のかつ丼》などが生まれ、今でも根強い人気がある。

《天麩羅》は素揚げが江戸に入ってきたとき誰かが衣を塗した。これが《江戸前の天麩羅》になった。その天麩羅が屋台から屋根付き店舗に変わると、より美味しさを求めて衣が薄くなった。一方の蕎麦屋の天麩羅は、麺も、つゆも、種も、衣も、美味しくしようとして段々厚い衣になっていった。また文明開化によって洋風のカレーやトンカツが世に現れたとき、これも蕎麦屋がとり入れた。これらは伝統の江戸の味(つゆ)の底力の上に開いた「近代蕎麦文化」といえよう。

振り返れば、江戸時代には咽喉を粹に滑る《二八蕎麦》が生まれ、「江戸蕎麦文化」の柱になった。

また現在は蕎麦の味を満喫できる《十割蕎麦》が好まれ、産地別蕎麦に関心をもたれている。そういう意味では、村瀬忠太郎の嘆いた「蕎麦はなぜ昔に還らぬか」が還ってきたのかもしれない。この傾向こそ「東京蕎麦文化」といえるだろう。

こうして各々の時代には各々の蕎麦文化が生まれている。そうした蕎麦文化は蕎麦職人と客の交流から生まれるものである。

では、未来はどんな蕎麦になっているだろうか。これも蕎麦屋とお客に委ねられている。だから、私たちはもっと蕎麦屋に通わなければならない。

## ◎後記…蕎麦文化を未来へつなごう

- ①拙著『新・みんなの蕎麦文化入門～お江戸育ちの日本蕎麦』の上梓後、②『暖簾めぐり』④⑤(最終回特別編)「そば文化を未来へつなごう」を江戸蕎麦史の姉妹編のつもりで書いた。  
③そしてこの度「名探偵と蕎麦～探偵小説にみる 東京蕎麦屋小史～」も姉妹編のつもりで書いた。

いずれも、浅はかな見聞に基づいていることは認識しているが、皆様とともに未来を推論するため、過去を語ったものをご理解いただければ幸いである。

「過去を語り、未来を創る」小林秀雄

## 《参考》

\*ほしひかる著『新・みんなの蕎麦文化入門～お江戸育ちの日本蕎麦』（アグネ承風社）

購入先:[agne-shofu@apost.plala.or.jp](mailto:agne-shofu@apost.plala.or.jp)

\*ほしひかる筆『暖簾めぐり』シリーズ「そば文化を未来へつなごう」

『蕎麦春秋』vol.59 『暖簾めぐり』④⑤(最終回特別編)

\*ほしひかる筆『そば文学紀行』シリーズ（『蕎麦春秋』vol.59～）

\*日新舎友蕎子著『蕎麦全書』

\*村瀬忠太郎『蕎麦通』

\*「藪忠」について：『蕎麦春秋』 vol.36 ほしひかる筆

\*村上元三著『加田三七捕物控 捕物そば屋の巻』

\*江戸川乱歩著『D坂の殺人事件』：講談社版(昭和44年)は「ソバ屋」としてある。

\*横溝正史著『壺中美人』『白と黒』

\*宮部みゆき著『砂男』

\*森鷗外著『護持院原の敵打』

\*「D坂の殺人事件」草稿(『大衆文化』 第二号)

\*真崎照郷記念碑 <https://www.youtube.com/watch?v=R-Q2PJFy93k>

\*平岩弓枝著『肝っ玉かあさん』

\*勝見洋一著「笑う天麩羅蕎麦」：蕎麦屋の《天麩羅》と《かつ丼》は、天麩羅屋の《天麩羅》ととんかつ屋の《とんかつ》とは作り方が違うことをテーマにしてある。

\*ほしひかる筆『暖簾めぐり』シリーズ (『蕎麦春秋』 vol.14～vol.59)

・出前機について：『蕎麦春秋』 vol.20

・「銅子会」と「木鉢会」について：『蕎麦春秋』 vol.28

・更科堀井について：『蕎麦春秋』 vol.19、『蕎麦春秋』 vol.47

・砂場について：『蕎麦春秋』 vol.25

・かんだやぶそば、上野藪そばについて：『蕎麦春秋』 vol.43、『蕎麦春秋』 vol.52、『蕎麦春秋』 vol.54

・尾張屋について：『蕎麦春秋』 vol.18

・神田まつやについて：『蕎麦春秋』 vol.58

以上